

運慶

平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて奈良・興福寺を拠点として活躍した仏師。日本の仏像彫刻史上、最も有名な仏師である。父は、平安時代の仏師・定朝の流れをくむ慶派という仏師集団を率いた康慶。当時は京都に拠点を置く院派と円派が貴族社会の信頼を得て勢力があったが、運慶の代になって鎌倉を中心として関東武士の信頼が得られるようになり、その立場は逆転していった。平安時代後期に京都でもはやされた定朝様式の仏像は、浅く流れる衣文や穏やかな表情などが平安貴族に好まれたが、運慶の作風は、量感に富む男性的で力強い写実的な表現に特徴があり、鎌倉期の武士の気風に合っていたともいわれる。運慶の後、息子の湛慶、康勝、康弁、父・康慶の弟子・快慶らが鎌倉時代の仏像彫刻界の中心となって活躍した。代表作に奈良・円成寺の大日如来坐像や興福寺の無著像、世親像などがある。